

禪學研究

禪界刷新

鈴木大拙

禪界刷新と云ふことについて一言したいと思ふが、これは必ずしも禪界に限られないのである。禪界の刷新は色々の方面にわたりに云はれる。が、今は禪堂における修行の方法とか學校における教育とか、禪僧の日常生活とか、禪寺の肅清とか、檀信徒に對する關係とか云ふやうな事項に關する刷新でなくて、禪僧が一人前の坊さんとして世間に立つには、どのやうな資格を具へるべきであらうかと云ふことについての刷新意見なのである。

このやうな刷新意見は目下禪堂及び學校における教育方法にも聯關することと思ふが、今は餘り深入りしない。只禪僧たる資格そのものについて一言するに止める。

自分の考へでは、今時の禪僧は一般に知識がない、學問がない、従つて自主的に物事を考へて、自主的に意見を立てることを爲し得ない——これが禪僧の大缺點である。禪と知識又は學問などと云ふと、矛盾極まつたことのやうに思はれよう。禪は元來學問でない、従つて禪を専門とする人には學問など無用の長物だと云ふことになる。これには大に愚見がある。

禪經驗そのものには學問も論理も智慧も才覺もいらぬ——それは本當である。が、禪は禪だけで濟むものでなくて、人が要る。人と云ふ器に盛らないと禪だけでは働きも何もなくなる。そうしてその人は社會人でなくてはならぬ故、社會的生活をするに必要な資格を持たなくてはならぬ。特に禪者は山の奥にのみ居るべきでなくて、大に當りに市中に出るべきであるとするれば、そうしてそれは他の人々を指導する役目を果たすためであるとすれば、禪者の禪はそれだけに止まるべきではないのである。禪者は禪的にも社會的にも指導者として確乎たる自主的意見の持主でなくてはならぬ。『自分は禪坊主だ、世間のことはわからぬ』と云つてすますわけに行かない。禪者の禪専門主義は科學者や碁打や藝術家などの専門主義とは大に違ふものがある。それは何かと云ふに禪者は禪専門家として又別に世間の人々を指導して行くべき立場に居るのである。禪者は社會指導者として自主的見方と考へ方を持つて居なくてはならぬ。

封建時代には禪堂十年の修行は禪者をして十分に社會的指導者たるの資格を得せしめた。彼は十年の薰習で一種の禪僧型なるものを仕上げた。漢文にも國文にも一わたりの知識を獲得した。また多少の藝能にも熟達して士君子の間に交はることも出来る。社會的にも可なりの修養が出来て居てどこへ行つても上位に坐はらされてひけをとらぬほどになつて居る。佛教思想にもいくらかの造詣があるので、信仰的に他を導くことも出来る。これだけあれば、彼は立派な一人前の禪坊さんとして、世間に推されて行く。その頃の世間は全體に一種の型にはいつて居たので、禪僧もそれにはまつて行けばよかつたのである。世間は彼に對して『禪僧』たることの他に、社會人として文化人として別に求むるところはなかつた。ところが今日はその頃の型で出来た禪僧では役に立たなくなつた。禪僧自身も俗人のやうな家庭生活をして居るのであるから、世間は彼に對しても知識人たる素養と矜持と節操とを要求するのである。もし禪僧にしてこの要求に應じられないとすれば、彼は田舎の坊守として葬式専門業者となるより外ないのである。

葬式専門を業としないと云ふなら、禪僧は知識人として知的良心を持たなくてはならぬ。昨日は戦争を謳歌し、今日は世界平和とか民主主義とか云ふことに没頭するやうな禪僧があるとすれば、そのやうな人は所謂戦争犯罪人のうちに入れて然るべきであらう。昨日は雨、今日は風、明日は天気、その時々の模様で何とでも應變する。それが禪だと云つて済ますわけには行かない。日常行事の間ではそれも亦一興に相違ない。食あれば食し、なければ餓ゑるも亦禪僧の面目であらう。が、知識人の禪僧としてはそれではすまされぬ。自主的に考へることの出来ない禪僧は、その自覺に徹底して何も言はずに、だまつて引込んで居るべきである。苟も公衆の前で何かの意見を——政治の上でも社會的にも道徳的にも——吐くとしたならば、その意見はたゞ雷同附和性を持つたものであつてはならぬ。それは自主的で十分に考へたあとの意見であつて、その意見が一たび發表せられたら、それをどこ／＼までも守り通すだけの知的良心がなくてはならぬ。人が言ふから自分も言ふ、権力者が言へと云ふから言ふ、その時々の風の吹きやうだと云ふやうなことがあつたら、其人の知的良心どころでない、道徳的操持においても、見下けてよいのである。世間は——殊に禪僧なら禪僧仲間で——彼を擯斥すべきであらう。

これは禪僧だけでなく、一般佛教僧侶の上についても言ひ得べきである。それは勿論であるが、此處では禪僧に限つておきたい。

禪僧に最も缺けたところはこの知的節操である。又道徳的矜持である。これがなくては「お悟り」も何もあつたものでない。お悟りだけでは社會の指導者を以て自ら任ずることは不可能である。不可能だけでない、思ひ上りである。禪僧は大に思を此に致すべきであらう。「禪はお悟りの外にない、禪僧はそれに徹しさへすればよいのだ」と云ふなら、それは最も妙である。その人は山にはいつて市に出ないことにしなくてはならぬ。そして山へやつて來るものを接待すると云ふ

ことにする。この人は世間に出て世間の事を何やかやと云はないのである。固より出る出ないは其人の自由であるが、出ても指導者ぶりはしないことである。お悟りにこの指導者意識を織り込んでならぬ。お悟りにはお悟りの世界がある。それだけで戦争の是非などを判断し得られるものでない。世間の紛糾にはその紛糾に處すべき知性的分別が入用である。固よりお悟りの人でも此分別は十分にある、或はそのお悟りの故に分別も却て透徹性をもち得ると云ふこともあるが、それは分別のどの方面にでもあてはまると云ふわけには行かない。お悟りとそれからの知的分別は哲學や論理などの方面に異常な役割をつとめるかも知れぬが、それを社會的一般文化面に向けてどれほどの効率があるかは問題になる。例へばお悟りは經濟と聯關せぬ。昔風の經濟なら兎に角であるが、今代のやうな複雑な國內經濟機構それから進んで國際間の關係になると一角の専門知識をもたぬと容易に意見は立てられぬ。共產的經濟機構がよいとか悪いとか云ふことは、單なる御悟りだけでは判断出来るものでない。それから先頃までやかましかつた全體主義にしても色々の方面から研究すべきであり、さうたやすく人の言ふところを眞似して國家とか全體とか云ふべきでないのである。禪者はその禪者たるの故で此の如き問題に容喙すべき資格はないのである。それに生半可の知識で雷同附和して、曲學阿世的に、時の權力者のために太鼓叩いて歩くなどは、禪者の面汚しである。

特に戰時中『八紘一字』とか『皇國佛教』とか『鎮護國家』とか『盡忠報國』とか云つて、大に東條内閣の肩を持つて歩いて居ながら、今日になると、先のこととは全くわすれたもの、やうに、民主主義だとか世界平和とか云ひ囃して居る禪僧が隨分の數に上ることかと思ふ。この種の禪僧の思想のないにはあきれが、それよりも反覆限りない自らの知的態度に對して何等の忸怩を感じないとしたら、これを何と批評すべきであらうか。『東畜米英』を叫んだ禪僧が今日尙怙然として指導者層に残つて居るとしたら、その仲間の人々はこれを何と見るか。官界や財閥や軍閥ではそれ／＼に——他から壓

迫せられながらも——何かの方法で肅清をやつて居るではないか。禪者が何かの意味で宗教家であり、『思想』指導者であるとしたら、或る種の肅清は他から加へらるべきでなくて、自分等仲間では何かやるべきでなからうか。

佛教者——特に自主自由を云ふ禪者が、他からの懲罰や壓迫で『犯罪者』を成敗すると云ふことになる、三界の大導師どころでない、現世だけでも救ふことが出来ぬと云ふことになるではないか。彼等はいつも他に先んじて世を憂ふことをしないで、他に後れてのみ居る。僧侶一般の意氣地なさも在ることであるが、苟も禪僧を以て自任するものが、何時も他から制せられ、他からつつつかれて動くこと云ふに至りては其不甲斐なき加減、底を知られぬと謂つてよい。

宗教と云ふものは何時も國家など云ふ小こさき梓の中に入れて居るべきではないのである。一般の世間が國家々々など云ふとき、『そのやうな半屋の中には、いるな』と云つて、『人間』をその中から救ひ出すべきが宗教の本分なのだ。固より常時じょうじも反國家であれと云ふのではない、人間は何處かで何かの手楮足楮をつけるのであるが、それが人間の本分だと考へられては『人間』は臺だなしである。械が柩くは械が柩くとして、それに括くられないもののあることに注意しなくてはならぬ。それが禪である、お悟りである。それに始めからその身を鎖で繋いでおいて、その鎖を『萬歳々々』で仰ぎ奉ること、如何にも非禪者の立場ではないか。禪はいつも封建時代の壓迫の下で生長して來たので、そしてその壓迫を利用して自己の榮利を圖つて來たので、飼主の手を嘗めるのも人情であらう。が、禪者としては、そのやうな盲目であつてはならぬ。禪には世界的使命がある。此使命は『鎮護國家』でも『寶祚無窮』でもない。もつとく大きなものがある。それに目を付けて居ないと、お悟りも何の役に立たぬ。

お悟りは知識分別を伴つて居なくてはならぬ。而かもその分別は飽くまでも自主性を持つたものでなくてはならぬ。受寶うぼう又は寶ほうであつてはならぬ。自家胸中から流出したものでなくてはならぬ。分別知識も御悟りのやうに他の寶を數へる

ものであつてはならぬ。これの出来ないものは指導者階級に加はるべきでない。自家底から出ない分別知識は、お悟りのやうに、必ず自分と離れて行く時節がある。道德的語彙で云ふと、そのやうな人では思想的矜持なるものを持ち合せて居ない。それ故、昨日は東と云ひ、今日は西と云つて居て、それで平氣で居られるのである。少し思想のあるものから見ると、如何にも不思議な心理態であるが、わからぬとあれば是非もない次第である。個人々々の場合はそれでもないが、禪僧なら禪僧と云ふ一かたまりの集團體から見ると、そのやうな個人は集團の名によりて擯斥すべきであらう。個人の立場からは『何だ大人氣もない』と云ふことになる。が、集團全般の節操とか自尊とか云ふものからすると、それではすまされぬ。日本人或は佛教徒の仲間には『大乘』精神又は君子寛容性とでも云ふものが持ち囃れる傾向があつて、集團の肅清を敢行せぬ習癖を持つて居る。これは決して望ましいことではない。自主的に考へることの出来ぬもの、知性的矜持、道德的節操のないものは、悉く禪僧團から排出しなくてはならない。お悟りのないものを師位から斥けると同一でなくてはならぬ。

これは禪僧だけでない、一般佛教僧の上について言ふべきことであるが、彼等は餘りに依他的であつた。これは封建制の下で出来上つた佛教團の事なので止むを得ぬものもあらう。併し彼等は宗教と云ふことに對して何等の考を持ち合せなかつた。宗團のことは考へたであらう、それは自分等の衣食住に關することだからである。が、彼等は禪なら禪なるものを眞正面まじらへんから見なかつた。即ち彼等は禪を『日本國』とか『皇室』とか云ふものに結び付けておいて、これを世界と云ふ廣い舞臺から見ることをしなかつた。衣食住は『國』から『室』からは得られるが、廣い世界からは直接に得られない。それで彼等は自ら世界を忘れて居た。其實禪の禪たるところは世界性を持つて居るところに在るのではないか。南泉の一株花には『鎮護國家』はない、又支那も日本もない、南泉も陸亘大夫もない。ソロモンの榮華をも超越して、テニソンの

庭の垣根で、直ちに宇宙の根源そのものに徹して居る。この一株花を、「國家」と云ふ花瓶―如何にそれが黄金琉璃の花瓶であつても、それに活けられて居ては、北の果、南の極へ持つて行くわけには行かない。忽ち萎んでしまふ。南泉の一株花は歐洲でも露西亞でも米國でも濠洲でも咲かなくてはならぬ、否既に咲いて居る、禪者はただそれを認識さへすればよいのである。政治的區域と云ふ遠州流生花の外に花はないと云ふ錯覺は、お悟り專賣の禪僧には、如何にも不似合なことではないか。

禪僧の視野の如何にも箱庭式であるのは、從來の日本人の多數と共に分け持つて居るところである。それは彼等が日本國の外に世界あることを知らなかつたと云ふ事實から來るものである。彼等の辯解に曰はく、「自分等は政治的權力者の指揮するままに動けばよいのだ。それが日本のためになるのだ。馬を鹿だと云へと云はるれば、はい〜鹿で候と云つて居ればよい。それで食べて行けるのだ。世界がどうのかうのと云ふは、禪僧のつとめではない」と。それで彼等は竹槍をかまへて戰車に向ふことを説いてまはつた。米軍が上陸すれば婦人は悉く汚辱せられ、男子は悉く去精せらるなどとさへ、まことしやかに言ひ廻つた。それで婦人の田舎落ちと云ふことも大分耳にした。こんなことを、彼等―指導的地位の禪僧が言ひ觸らしたのは、馬を鹿と云へと命ぜられたからだと云ふ辯明で片付けられるとすれば、此の如き禪僧は禪界から葬り去るべきではなからうか。禪僧―「お悟り」専門の禪僧の知性的賢命さに一驚を喫するより外ないではないか。

兎に角、今日の禪僧には知性が不足である。何だか少し分つたやうなことを言つて居ても、それは受賣と貫賣とである。馬を鹿と云ひ、鹿を馬と云ふこと、お悟りからは、是亦妙であらうが、世間分別の面で尙そのやうな事を口にして、それでお悟りを知らぬ世間人を『指導』して行く覺悟か自信があるとすれば、如何にも情ないではないか。さうしてそのやうな『指導者』を默認して居るほどの禪界は亦目出度き限りではないか。

自分は、何はさておき、禪僧のもつとく自主的に物事を考へる力を養ふことにしたい。これのないお悟りは太平洋の眞只中に底深く沈めてしまへ。それが出来ぬと云ふなら公堂壇上から戰時中一切の言動に對して自分等の不明と無批判とを白狀し懺悔すべきであらう。

あの人は宗教的だと教へられたとしても、なほ吾々はその人の道徳はどうかといふことを訊いて見る。けれどもあの人は正直な道徳をもつてゐる、そして生來、正と善の氣質の人だと最初から聞かされる場合には、吾々は誠に多にそれ以外の疑問を、たとへばその人が宗教的で敬虔であるかどうかといふやうな疑問をいだくことがない。

(シヤフツベリ)

現今ではひとり虚偽のみが道徳的である。何となれば、それは眞理の惡を、又は同じことであるが、惡の眞理を回避し隠匿するからである。眞理は我々の時代においては科學の限界である。科學が眞理に近づき眞理になる所においては、科學は警察の客體になる。警察は眞理と科學との間に立つところの境界である。(フォイエエルバツ)